

Offprint from:

『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』
平成10年度（第2号）1999年3月発行

*Annual Report of
The International Research Institute
for Advanced Buddhology
at Soka University
for the Academic Year 1998
[= ARIB], vol. 11, March 1999*

辛嶋静志・吹田隆道・工藤順之

「Mahākarmavibhaṅga と Karmavibhaṅgopadeśa (1):
ネパール国立古文書館所蔵の写本」

Seishi KARASHIMA, Takamichi FUKITA and Noriyuki KUDO

*Mahākarmavibhaṅga and Karmavibhaṅgopadeśa (1):
Two Original Manuscripts preserved in National Archives of Nepal*

The International Research Institute for Advanced Buddhology
Soka University
Tokyo · 1999 · Hachioji
JAPAN

創価大学・国際仏教学高等研究所
東京・1999・八王子

Mahākarmavibhaṅga と *Karmavibhaṅgasūtra* (1)

ネパール国立古文書館所蔵のサンスクリット写本

辛嶋静志 工藤順之 吹田隆道

I 序論

1. *Mahākarmavibhaṅga*

『マハー・カルマ・ヴィバンガ（大いなる業の分類）』（*Mahākarmavibhaṅga*¹, abbr. MKV.）はその名が示すように、在家者に対して前世の業とその果報（即ち、業報思想）に関してブッダが解き明かしていくという内容のテキストである。現在のところ、これを伝承していたとされる部派は確定していないものの、そこに引用される文献を帰属部派が明確な文献と比較対照することから、消去法によって、例えば並川孝儀に依れば、説一切有部・化地部・法蔵部・大衆部系であることが否定され²、犢子部・正量部（特に後者）の所属可能性が高いとされる³。一方、MKV とそれに対する注釈書である *Karmavibhaṅgopadeśa* (abbr. KVV.) に引用される文献のうち、*Catuṣpariṣatsūtra*, *Mahāparinirvāṇasūtra*, *Mahāsamājiyasūtra* といった文献との対応を調査した Ch. Tripāthī は、漢文資料を殆ど扱っていないにも拘わらず、法蔵部の可能性を示唆するが、説一切有部系の文献が引用されていないことから同派所属を否定する⁴。

¹ 後に論じるように(4.1)、この *Mahākarmavibhaṅga* という文献名には疑問が残る。これは MS[A] にのみ見られる題名で、しかも *Karmavibhaṅgopadeśa* が筆写され終わって登場する名である。但し、ここでは便宜上それぞれ MKV と KVV. と呼ぶことにする。

² 並川 [1984a], p. 74.

³ 並川 [1985b], p. 770; [1984c], p. 39; [1985a], p. 10.

⁴ Tripāthī [1966], p. 213.

このテキストは発展していくいわば「鸚鵡経類」¹の最後期に成立したものと考えられており、分類される業報の種類は初期段階のものに比べて数倍にも上る²。その分類を挙げていく中で20種の引用文献が挙げられ、また KVVU には29種の典籍が引用されている。部派仏教研究にとって資料の宝庫といえるが、現在までの研究はあまり多くない。

2. テキスト出版

MKV は 1932年 Sylvin Lévi によって、その注釈書とされる KVVU と共に出版された³。この Lévi 出版本には更に、MKV のチベット訳と漢訳 2本 (T Nos. 80, 81)、そして Pāli Majjhima Nikāya No. 135 *Cūḷakammavibhaṅgasutta* と、*Papañcasūdanī* 内のその注釈書、また中央アジア出土の *Sukasūtra* とクチャ語写本の断片とが収録されている。

このテキストは後述する 2本のネパール写本に基づいて校訂出版されたが、いわゆる「仏教梵語」の特徴を備えているものとして見なされている。それは例えば、Louis Renou が Jean Filliozat と共に編集した *L'Inde Classique — Manuel des Études Indiennes* の中で §98 “Le sanskrit bouddhique” の項目の下に、Lévi 本から MKV (p. 32 とその部分の仏訳 p. 112) の一節を引用している。また Franklin Edgerton の *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, 1953 (Yale University Press) にもその用例が相当数引用されている⁴。

3. 写本

さて MKV は Lévi が 1922年 7月にネパールで発見した写本を基に校訂されているが、彼はその発見の経緯について以下のように記述している。

Dans un des lots que j'examinais, j'aperçus un manuscrit d'aspect singular, trace sur une sorte de carton tres foncé, de petit format, et plié en paravent, comme c'est le cas assez fréquemment pour certains manuscrits bouddhique. L'écriture indiquait le XIV^e-XV^e siècle. Je m'empressai d'examiner le colophon; il donnait le date de 531 (ère Névare de 880 L.C.) soit 1410-11 J.-C., et le titre révélait un ouvrage inconnu. (Lévi [1932], Introduction, p. 1)

しかしこの発見はネパール滞在の最後の日であったため、写本のコピーを Hemraj

¹ 所謂「鸚鵡経類」に関しては Lévi [1932] の Introduction, それに対する書評を含む山田 [1932], そして成立史上から 2種に分類する並川 [1984c] を参照されたい。

² 並川 [1984c], pp. 31-33 を見よ。

³ *Mahākarmavibhaṅga (La Grande Classification des Actes) et Karmavibhaṅgopadeśa (Discussion sur le mahā Karmavibhaṅga), textes sanscrits rapportés du Nepal, édités et traduits avec les textes parallèles en sanscrit, en pale em tibetan, en chinois et en kutchéen*, Paris. Lévi 本の MKV と KVVU は sandhi の修整と若干の読みかえを付されて Vaidya [1961] に収められている。

⁴ Edgerton は「仏教混淆梵語」(Buddhist Hybrid Sanskrit) によって書かれた文献を 3種に分類している。その内、MKV (及び KVVU) は第 3類に含められている。

Sharman に依頼してネパールを去る¹。ところが、Lévi が日本に滞在中、彼が発見した写本以外の第2の写本が発見されたことを Hemraj Sharman からの手紙によって知らされ、程なくしてその第2の写本の「コピー」も受け取ることになる²。Lévi が最初に発見した写本は、先に引用したようにネパール紀元531年という奥書 (folio no. 77v.5) を持つもので、彼はこれを MS[A] と名付け、写本そのものを実見していない第2の写本を MS[B] として、校訂テキストを出版する。

現在これら二本の写本は National Archives of Nepal に保存されており、「ネパール・ドイツ写本保存プロジェクト (Nepal German Manuscripts Preservation Project, NGMMP)」によってマイクロフィルム化されている。したがって、我々は Lévi 本の基となった写本そのものを、或いはマイクロフィルム上で、実際に調査することが可能である³。写本を読み直す作業の中で明らかになってきた Lévi 校訂本の問題点と、そこから派生した既存の理解に対する別解釈の可能性を幾つか以下に指摘する。

4. 写本再検討

4.1 文献名

まず、写本の奥書について確認しておく。MS[A] は帰敬偈に続いて因縁譚、*Dharmaparyāya* とその *Uddeśa*⁴ から成る MKV に続いて、奥書も、その終了を告げる文もないままに第61葉 recto 3 よりKVU が葉・行を変更することなく筆写されている⁵。

61 r. 2 grāhyaṃ cāsyā vaco bhavati || imāni da

61 r. 3 śa viśāradyaṇi || ◎ || śakhakṣīramṛṇāla ○ kundakumudaprasmarahāra-prabhaiḥ

¹ Lévi [1932], Introduction, p.1: Le Rajguru ... Hemraj Sharman, ..., eut la bonté de surveiller et de reviser lui-même le travail du copiste.

² Loc. cit.: Un peu plus tard, tandis que j'étais au Japon, une lettre de lui — écrite dans ce sanscrit élégant qu'il manie avec une aisance magistrale, m'annonçait la découverte d'un nouveau manuscrit du même texte, et bientôt après j'en recevais la copie.

³ ここで写本のマイクロフィルムを供与する等様々な便宜を与えて下さったネパール国立古文書館の前の Director である B.D.Dangol 博士、そして NGMPP に謝意を表したい。

⁴ *dharmaparyāya* は Lévi, p. 29, 30-p. 32, 2 であるが、その冒頭部分の “*tatra Bhagavān Chukam Māṇavakam Taudeyaputram idam avocat. Karmavibhaṅgam te Māṇavaka dharmaparyāyam deśayisyami*” という一節は MS[A], 7v.3 になく、MS[B], 5r.1 に基づいている。また *uddeśa* は Lévi, p. 32, 3-p. 105 になるが、その始まりとなる “*uddeśaḥ Karmavibhaṅgasya dharmaparyāyasya*” も MS[A], 10v.3 には *dharmaparyāyasya* という単語はなく、MS[B], 6v.4: /// + + .. [m]. [d].eśaḥ karmavibhaṅgasya dharmaparyāyasya || とあることに依っている。

⁵ Lévi [1932], Introduction, p. 2: ... c'était une sorte de dissertation plutôt qu'un commentaire du texte précédent, une sorte de śāstra du type upadeśa (je le désignerai désormais sous le titre de Karmavibhaṅga-upadeśa (abréviation: Up.) ...

Mahākarmavibhaṅga というタイトルは KVU が終わった第77葉 recto 5-verso 1-2 (= Lévi, p. 167, 8-14) に見出される。(以下の転写には誤写等をそのまま残してある)

- 77r. 5 mahākarmavibhaṅga | ucyate | mahāntikā karmāny atra vastareṇa
vibhaktāni | tasmāt mahākarmavibhaṅgaḥ | saṃgrahasāra karmavibhaṅga-
sarvasāra karmānān hino-
77v. 1 t*kr̥ṣṭamadhyamāni vistareṇa kathāmukhāni darśitāni | tasmād api
mahākarmavibhaṅgaḥ | goṭrāntariyānām abhidharmakasa(m)yukteṣu |
mahāka(r)mmavibhaṅgo nā-
v. 2 nāḥ samāptaḥ | |

写本の筆写された状態から見る限り、*Karmavibhaṅgopadeśa* という名は Lévi の命名によるもので、写本にはそれを示唆するものは何もない。

一方 MS[B] は KVU を持たず MKV のみを伝えるが、その写本最後には MS[A] にある “imāni daśa viśāradyaṇi” というまとめの句がないものの、*Karmavibhaṅgasūtra* の終了を告げる奥書を持っている。

35v. 6 grāhṛ cāsyā vaco bhavati | karmavibhaṅgasūtraṃ samāpta[m]

奥書部分を見る限り、我々が MKV とする文献名は MKV と KVU の両者を持つ MS[A] の末尾のみに現れ、MKV を単体で伝える MS[B] にはそれが現れないことが判る。写本がそれぞれ一種ずつしかない今の状況では即断はできないが、我々が(便宜上) MKV と呼ぶ文献のみを筆写した MS[B] には *Mahākarmavibhaṅga* という名が現れず、その代わりに *Karmavibhaṅgasūtra* と呼ばれていること、KVU を含む写本に唯一 *Mahākarmavibhaṅga* という名が記されることからすると、我々が Lévi 校訂本中の MKV と呼ぶ文献は *Karmavibhaṅgasūtra* であり、写本の *Mahākarmavibhaṅga* という文献名はこの *Karmavibhaṅgasūtra* と Lévi 命名の *Karmavibhaṅgopadeśa* の(少なくともこの写本が筆写されたときの)総称に過ぎないかもしれない。これについては現時点では示唆程度にとどめ、他文献との関連を含めて別稿に譲りたい。

4.2 写本葉数

次は、写本の現存葉数である。Lévi は MS[A] を 78 葉からなり、第 49 葉が失われ、第 69 葉がまた失われているとしている。したがって、MS[A] に関しては 76 葉だけが現存することになる。しかし、現在ネパール国立古文書館のこの番号に保存されている写本の束には更に、おそらくは *Vajrasūci* に関係すると思われる 2 葉が付随している¹。この 2 葉が元々 MS[A] に付随して伝承されてきたものだろうが、ただ、*Bṛhatsūcīpatra* では写本葉数は 100 となっており、逆に残り 22 葉或いは上記 2 葉を除けば残り 24 葉がどこにいったのかという問題が生じてくる。すくなくともネパール国立古文書館での保存状況では MS[A] は全 78 葉からなるバンドルに含まれ、

¹ これら帰属曖昧な 2 葉に関しては別の機会に扱いたいと考えている。

MKV と KVU に関しては第1-48, 50-68, 70-78の計76葉が残っていることになる。

また MS[B] についても Lévi は35葉から成り、第1-3, 9-10, 16-17 の7葉が失われているとしているが¹、テキストの脚注にあるように第8葉も失われている²。その限りでは現在は27葉が残ることになるが、保存されている写本のバンドルでも *Bṛhatsūcīpatra* でもその葉数は29である。この付加的な2葉は MS[B] と同じ形状で磨耗しており、つまり、左端が上部から下部にかけて左下がり欠損し、右端上部が丸く磨滅しているが文字筆写部分は欠損していないことから³、MS[B] と共に保存されてきたことが明らかである。

この2葉は MS[B] と共に保存されてきたとはいえ、本来は MS[B] に属するものではなく、*Karmavibhaṅgasūtra* に関わる第3のネパール写本である。このことは既に吹田隆道によってチベット訳 *las rnam par 'byed pa* と漢訳『分別善惡報応経』(T. No. 81)、特に sTog Palace Kanjur に含まれる (No. 287) とによく一致する (即ち、MKV とはその業の果報の列挙順が一致しない) ものとして報告されている⁴。

こうした写本の葉数に関する Lévi の記述が実際の写本の保存状況に一致していないばかりか、第3の写本についても何ら記述されていないのは、その最もあり得る原因として、彼が写本そのものでなく、Hemraj Sharman の筆写した写本コピーを使用したことを指摘することが出来る。コピーがどのようなものか残念ながら今となっては調査できないが、全く同じ形状で付加的な2葉が保存されてきたことが明白で、しかも同一番号にまとめられて保存されているのであるから、もし Hemraj Sharman がそのまま筆写して Lévi に送っていたとすれば、写本コピーであっても Lévi の眼に止まらなかったはずがない。そこに書かれている内容は、MS[A], [B] と業報分類の列挙順が異なるとは言え、MKV に対応するものであり、しかも MKV と列挙順が相違する文献の存在、即ち Tibetan Kanjur と漢訳の両者を、Tableau Comparatif⁵に示されているように、Lévi 自身が知っていたからである。

Hemraj Sharman がこれら MS[B] に付随している2葉のコピーを Lévi に送ったのか送らなかったのか、そしてもし送らなかったとすれば何故なのか、今となっては推測に推測を重ねる以外に出来ることはないのだが、付加的2葉の保存状況から判断する限り、Lévi は MS[B] 写本原本を実見していないばかりか、この2葉の存在すらも知らなかったと言わざるを得ないであろう。

¹ Lévi [1932], Introduction, p. 2.

² Lévi [1932], p. 32, fn. 10: ... lacune de 3 feuillets.

³ この欠損・磨滅の外観に関しては Fukita [1990] に添えられた写真判を見られたい。但し、MS[B] とこの2葉は筆写形式が異なる。MS[B] は6行写本で第2-5行の左寄りに綴じ穴用の空白があるのに対して、後者は7行写本で第3-5行にかけて綴じ穴部分が確保されている。また文字も異なる。

⁴ Fukita [1990] を見よ。

⁵ 第3の写本との関係で言えば、Lévi [1932], pp. 18-19.

4.3 テキストの読み

第3は、テキストの読みである。Lévi が写本そのものを基にテキストを校訂していないという仮定は、テキストの読みからも支持される。彼が手にした写本コピーが Hemraj Sharman によって「正しい」サンスクリット転写が行われたものであることは想像に難くない¹。そのため、Nevāri から転写されるときに（それは Devanāgarī に転写することを意味しているのだろうか？）、Nevāri 文字の表記法が「正され」てしまったのではないか。尤も、それは Sharman の側で「正してコピー」してしまったのか、それとも Lévi の写本の読みを反映しているのかは判らない。

その一例を挙げると、導入部分の因縁譚に登場する犬は Lévi 本では “śaṅkha-kuñjara” とされているが、写本では “śaṅkha(ṣaṅkha)-kukkura(ḷkukkura)²” とある。これを訳すと「シャンカという犬・貝（のように白い）犬」であり、あくまで犬の名、或いはその容姿を表す語として ‘śaṅkha’ を理解すればよい。ところが、‘kuñjara’ と読めば、これを含めて「シャンカ・クンジャラ」という名の犬として、「犬」を補わなければならない³。‘kukkura’ と読むことで、実際漢訳でも『中阿含』『鸚鵡経』では「白狗」⁴とあり、『分別善惡報応経』では「有一犬名曰商佉」・「與商佉食」⁵、『仏説鸚鵡経』では「有狗名具」・「白狗」⁶、『仏説兜調経』でも「其家作狗子。名曰驟」・「白狗」⁷とあり、その訳は ‘kuñjara’ より ‘kukkura’ の方によく一致する（これら以外の漢訳またチベット語訳には因縁譚は存在せず、したがって犬は登場しない）。これは Nevāri の結合文字 ṅja と kku が時として非常に区別しにくい為に、ṅja と読んだのであろう⁸。その読みが Lévi のテキ

¹ Lévi [1932], Introduction, p. 2: ... Hemraj Sharman, ... eut la bonté de surveiller et de reviser lui-même le travail du copiste. ... écrite dans ce sanscrit élégant qu’il manie avec une aisance magistrale.

² ś- と s- は一貫性なく混同されており、-kku- と -ku- も混在している。

³ Lévi は “śaṅkha-kuñjara” を “[le chien] Conque-Éléphant” と訳している。Monier に依れば ‘kuñjara’ の意味は “an elephant; anything pre-eminent in its kind (generally in comp. ...)” や固有名である。文脈から「吠える動物」であることは理解可能であるが、‘śaṅkha’ と ‘kuñjara’ という単語の意味からだけで因縁譚の一登場人物としての「犬（狗）」はどうやって理解されるだろうか。

⁴ T. 1, 703c24ff.

⁵ 順に T. 1, 895c4, 5.

⁶ 順に T. 1, 888b19, 20.

⁷ 順に T. 1, 887b6, 8.

⁸ MKV には -kukku- という文字列は他に3例現れる。それは Lévi 32.9 “kukkuṭādayas”; 33.18 “kukkuṭādinām”; 44.19 “kukkuravratika” である。それらはそれぞれ MS[A] と MS[B] の順で示すと、11r.1=6v.5; 12r.5=7v.3; 21v.2=12v.3 に相当し、その全てが kku- と読める。MS[A] と [B] は文字が若干異なるが、我々が kku- と読む文字は MS[B] については同一である。MS[A] では ku- と kku- が混在している為に一括しては言えないが、kuku- と読む場合に第1の ku- と第2の -ku- は同形であり、kukku- と読む場合には -ku- の文字に k- が上についた形が2番目にある。つまり、Lévi 本の因縁譚では -ṅja- と読まれる同じ形の文字がテキストの別の箇所では -kku- と読まれていることになる。

ストでは「シャンカ・クンジャラ」という固有名になったのである¹。

4.4 BHS 語彙

第4は先に触れたように、「仏教梵語」の用例として Edgerton によって取り上げられる語形である。これは Lévi による「正しい」サンスクリット化によって生じたものとして理解できる。

4.4.1 “āstīryati”

‘āstīryati’ という見出し語が BHSD, p. 111 に見出される。これは “āstīryati = ar(t)tiyati, q.v.: Karmav 47.26; 49.2” として、MKV のみから採取された語形で、BHS §43, p. 204 では “false hyper Skt.” と見なされている。この語に対して、Edgerton があるべき語形として挙げている “ar(t)tiyati (BHSD, p. 66)” の (3) に “like preceding but accompanied by parallel forms of hrī-, jugups-, or the like”² として MKV 47.26 の用例が彼の訳と共に与えられている³。この見出し語には更に “ar(t)tiyati, ar(t)tiyate” という形も併録され、また、‘ārtīyate’ という形も問題がある一節 (“in one doubtful passage”) からと断りながら (4) に挙げられる *Mūla-Madhyamika-Kārikā* の注釈、即ち *Prasannapadā* から採られている⁴。この ‘ārtīyate’ という形は、BHS §43, p. 204 でも “once ārtī°(? v.l. attī°; no other occurrence has unambiguously ā-)” とあって、語形としてはまるで誤写であるかの扱いを受けている⁵。

こうした Edgerton の記述は Lévi の「校訂」テキストが基になっているが、実際の写本で当該箇所を確認すると以下のようなになる。幸いなことに MS[A] と [B] の両者から回収可能である。 (‘āstīryati’ について Edgerton は二例のみ挙げているが、

¹ 漢訳経典に見られる狗の名については並川 [1985a], p. 30 に触れられている。尚、Pāli *Cūlakamma-vibhaṅga* には狗は登場しないが、*Papañcasūdanī* では ‘sunakha’ が登場する。

² Edgerton は更に *Mahāvastu* の用例を挙げている。“atha khalu bhikṣavas te satvā tena adharmeṇa artīyantā vijigupsitā evāhaṃ pi vipravasensu dvy ahaṃ pi ... (Senart edition, I, 343,1)” Senart はこの箇所の写本の読みを注記して、“BC tena dharmeṇa attīya°” という読みがある。*Mahāvastu* にはまた “... pamjarasya attīyati pāṭīyekaṃ vināpaṃ ... (II, 242, 13)” という用例があり、その注記は “pamjarasya arttīyati pāṭīyakaṃ ni°” である。

³ BHSD, p. 66: āstīryati jihreti vīgarhāti vijugupsati, is distressed, ashamed, offended, disgusted (by acts he has done).

⁴ BHSD, p. 66: in one doubtful passage perhaps ārtī°, otherwise always art° when not fused in samdhi with preceding vowel; (4) ... text ārtīyate (ebhyo dharmebhyo), but v.l. attīyate, so prob. read. *Prasannapadā* からの用例は次の通り。“sa ebhyo dharmebhyo ārtīyate jehriyate vitarati vijugupsata uutrasyati samtrasyati samtrāsāmāpadyate (297, 2-3); idam samudayaprahāṇam yad idam ebhyo dharmebhyo ‘rṭīyanā vijugupsanā (ibid., 4)” [ed. by de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica IV]. Edgerton が記しているように、これらの用例は前者に対して ‘attīyate’ または ‘ārtīyate’ という読みが、後者に対しては ‘artīyanā’ という読みが写本にある。尚、これらの一節にも現れる ‘jehriyate’ については本文をまた見よ。

⁵ BHS 化の著しい *Bhikṣuṇī Vinaya* には一例が見いだされる。“... āṅgajāte āṅgajātaṃ prakṣiptaṃ ārtīyati ārtayitvā svādayati (§114, 2B.8.7, p. 77, 7) [ed. by Gustav Roth]. しかしこのテキストには ‘artīyati’ という形もある。“evaṃ suptasya mṛtasya āṅgajāte āṅgajātaṃ prakṣipitvā artīyati” (§115, 3A.1.1, p. 77, 14); “sā pi dāni tena tīrthika-bhāvena tīrthika-bhāvenārtīyati” (§161, 4A.7.6, p. 140, 8).

四例ある。)

1. Lévi 47.26-48.1. (() 内のボールド数字は行・葉の始まりを示す)

yat kṛtvā karma āstīryati¹ jihreti vigarhati vijugupsati deśayati ācaṣṭe vyaktikaroti.
MS[A] 24r.2-3.

yat* kṛtvā ka<<rmma>> ārttīyati | (3) jihreti | vijugupsati | deśayaty ācaṣa○te
vyaktikaroti.
MS[B]14r.2.

... .. .iy. .il [je]h.īyati | vibhavati vijugupsati | ○ deśayaty ācaṣṭe vyantikaroti |

2. Lévi 49.2-3.

sa tat karma kṛtvā nāstīryati. na jihriyati² na vigarhati jugupsati na deśayati
nācaṣṭe na vyaktikaroti.
MS[A] 25r.1-2.

sa tat* karmma kṛtvā nārttīyati | na vi³hriyati | na vijugupsyati | na deśayati |
nācaṣṭe | na vya (2) ktikaroti |
MS[B]14v.1-2.

śa taṃ kṛtvā nārttīyati | na [j]ehr[īy].[ti] | n. ju <<+>> .ps. te | na de (2) + .. ti |
nācaṣṭe | na vyantikaroti |

3. Lévi 49.9-11.

sa tat kṛtvā nāstīryati na jihriyati na vigarhati⁴ na jugupsate na deśayati nācaṣṭe
na vyaktikaroti.
MS[A] 25r.5-26R1.

sa ta taṃ kṛtvā nārttīyati | na vijihriti | na vijugupsyati | na deśayati | nācaṣṭe | na
vyaktikaro (25r.1) ti.
MS[B]14v.4.

śa taṃ kṛtvā nārttīyati | ○ na jehriyati | na vibharati | na vijugupsate | na deśayati |
nācaṣṭe | na vyantikaroti |

4. Lévi 49.16-17.

saa tat kṛtvāstīryati. jihriyati. vigarhati vijugupsati ācaṣṭe. deśayati. vyaktikaroti.
MS[A] 25v.4.

kṛtvā ārtti○yati | jī⁵hriyate | vijugupsyati | ācaṣṭe deśayati | vyaktikaroti |
MS[B]14v.6-15r.1.

sa taṃ kṛtvā ārttīyati | jehriyati | vibharati | viju (15r.1) + + + + + .. yati |
vyanti<<ka>>roti |

¹ Lévi [1932], p. 47, fn. 8: B om. *ucyate ... āstīryati*. これは MS[B] で省略されているのではなく、部分的に欠損している為に、Sharman のコピーには転写されていなかったのであろう。写本では明らかに -iy- まで読めるから、-ttīrya- にはならない。またこの脚注で Lévi は MS[B] の [je]h.īyati を jihriyati と、vibhavati を vitarati と読み間違えている。

² Ibid., p. 49, fn. 1: A *naiva bhriyati ...*; B *na vitarati na jugupsate*. この Lévi の注記は写本に全く一致しない。

³ この文字 vi- は書き換えられている。元々は vi- で、その右側にある母音記号の -i が消され、左側から -i の母音記号が加えられている。

⁴ Lévi [1932], p. 49, fn. 4: B *vtarati*, A om. et a ensuite. vitarati は vibhavati の間違い。

⁵ ここで一文字分が消されているが、それが何であったかは読みとれない。

以上のように、MS[A] と [B] とでは若干の異読が見られるが、ここには Lévi がテキスト化し、Edgerton が “false hyper Skt.” として挙げた ‘āstūryati’ という形は影も形もない。むしろ、“in one doubtful passage” に見られる語頭の ā- を持った読み（しかし人称語尾は active ending）‘artūyati’ が MS[A], [B] 共に一貫して現れる。

この Lévi の読みは -rttīya- र्त्तिय という文字を -stīrya- と読んだ誤読に基づくのである。これが誤読であるのは以下の文字上の特徴による。

- ① MS[A] では r- が -ttī- の右上に見られ、したがってその r- は基字 -ttī- の前で読まなければならないこと。
- ② MS[B] では tt- は第一の t- を表す文字が些か装飾の度合を強めて右下に斜めに流れる筆致で書かれ、それは一見した所 s- に見えるが、Nevārī の s- に -t が結合すると s- の右縦線の下に -t が置かれる形となるにも拘わらず、写本では後続した -t の上には縦線が存在しないこと。
- ③ また -ry- という結合文字は Devanāgarī のように基字 y- の右上に r- を表す文字記号が加えられるのではなく、y- の文字の左中ほどやや斜めに r- を表す文字記号が加えられる。

それ故、Lévi の読む stīrya という 2 文字は rttīya と読まねばならない。

4.4.2 ‘jihriyati’

またこの一節中のもう一つの動詞形 ‘jihriyati’ も問題となる語形である。BHSD, p. 243 には “(to root hrī, q.v. in Chap. 43), is ashamed; so best ms. Karmav 47.26 for text jihreti; and so ed. 49.2, 10, 16” とあり、これも MKV からのみ採取された語形である。BHSG §43, p. 239 には hrī- の (3) としてこの語形が挙げられ、Skt. と Pali の混合形ではないかと述べた後、‘jihreti’ の誤写で、‘jihriyati’ には写本の支持がないとしている¹。

この語形を先の写本転写部分からそれぞれ抜き出して並べてみると以下のようになる。

| | Edgerton (based on Lévi) | MS[A] | MS[B] |
|-------|--------------------------|-----------|-----------------|
| 47.26 | jihreti | jihreti | [je]h.iyati |
| 49.2 | jihriyati | vihriyati | [j]ehr[iy].[ti] |
| 49.10 | jihriyati | vijhriti | jehriyati |
| 49.16 | jihriyati | jihriyate | jehriyati |

この対照から明白なように、Lévi のテキストは第 1 例のみが MS[A] に基づいてい

¹ BHSG §43, p. 239: blend of Skt. jihreti and Pali hiriyati? § 28.25; Pres. jihriyati, v.l. for jihreti Karmav 47.26; in 49.2 text jihriyati without support of mss., one of which reads hriyati, the other omits; in 49.10, 16 text with mss. jihriyati (v.l. in 16 °te). この内 49.2 の用例は Lévi [1932], p. 49, fn. 1 に基づいているが、Edgerton のいう前者の写本は MS[A]、後者は MS[B] である。

るが、第2、3、4例はどの写本にもその読みの支持はない。また Lévi の注記を見てもそこに提示された写本の読みは実際の写本に一致していない。第2例では、Edgerton が Lévi の註に基づいて写本の支持がないとしているが、それはこの用例だけでなく第3、4例も同じであり、その上テキスト及び脚注において読み自体が誤っているのである。第2例の MS[B] も、やや読みにくいとはいえ、読めなかった為であろうが、Lévi, p. 49, fn. 1 に提示される MS[B] の転写部分にはこの単語が挙げられていない。それを Edgerton は “the other omits” としたのである¹。

ところでこの語形は MS[B] では一貫して *ji-* が *je-* と書かれている。母音記号 *-i* は文字の左側に縦線とその上部に鉤状の線が基字に向かって下げられる形であり、母音記号 *-e* は基字の左側にやや左側を膨らませた弧を描いて書かれる。MS[B] ではこの *-e* となっていて、その上には鉤状の線は存在しない。Lévi 47.26 にあたる MS[B] に一部欠損が見られるものの、MS[B] では ‘*jihriyati*’ の代わりに ‘*jehriyati*’ が用いられていたと考えられる。この語形をどのように説明できるであろうか。

この語幹部分 ‘*jehriya-*’ は $\sqrt{hrī-}$ の Intensive の語幹、即ち、*ya(N)-* を語根に添加した後、語根に重字音節が生じたもの（重字音節の母音に *guṇa* 音代用）と一応は分析出来る²。しかし Intensive では *ya(N)* を添加した語幹は *Ātmanepada* で活用するから、もしこの ‘*jehriya-ti*’ を Intensive でとるならば、これは BHS では頻繁に見られる active ending (*Parasmaipada*) と middle ending (*Ātmanepada*) の混用によるもの、つまり ‘*jehriya-te*’ が ‘*jehriya-ti*’ となったものと理解しなければならない。そうすると BHS §39.3, p. 197: “An intensive to *hrī*, not recorded in Skt. or MIndic”³ とある ‘*jehriyate*’ に対する別形がここから得られることになる。

或いは、BHS §28.25 に示されるように、 $\sqrt{hrī-}$ の現在形 (*ji-hre-ti*) が Intensive 型の重字音節を持った形 (*jehriya-ti*) と考えれば⁴、現在形でも読める。

また、Lévi のテキストのように ‘*jihriyati*’ が正しく、MS[B] では *-i* が *-e* に書かれているだけとも考えられるが、写本には ‘*jihriyati*’ という読みはないのだから、Lévi のテキストには無理がある。単純に *ji-* を *je-* と誤写したものである可能性については、MS[B] の当該箇所は全て同じ形状の文字を持ち、読み手側の読みの違いによって母音記号が *-i* と *-e* と読めるケースではないから、誤写の可能性はまずないであろう。

¹ 前注参照。

² Pāṇini 3.1.22: *dhātor ekāCo hāLādeḥ kriyāsamābhīhāre yāN* [$\sqrt{hrī-}$ + *yaN*]; P.6.1.9: *saN-yāN-aḥ* [*hrī-hrī- + ya°*]; P.7.4.60: *haLādih śeśaḥ* [*hrī-hrī-ya- > hi-hrī-ya-*]; P.7.4.59: *hrasvāḥ* [*hi-hrī-ya- > hi-hrī-ya-*]; P.7.4.62: *kU-hoś cUḥ* [*hi-hrī-ya- > ji-hrī-ya-*]; P.7.4.82: *guṇāḥ yāN-luKoh* [*ji-hrī-ya- > je-hrī-ya-*].

³ BHS §43, p. 239: (4) Intens. *jehriya-te*: recorded nowhere else, not even in Pali; BHSD, p. 244: *jehriyate* (nowhere else recorded; intens. to *hrī-*), *is much ashamed*.

⁴ BHS §28.25, p. 138: The forms of *hrī* are varied and confused: *briyāyati* (and perhaps *briyā°*, denominative?), *jibriyati*, *jehriyate* (with intensive type reduplication), and perhaps *briyati* (which might be based on ppp. *briṭa-*, like *nīta-*, but the form is questionable, see Chap. 43).

他方、MS[A] の読みは全く一貫していない。第1例は√hri- の現在形そのものであるから問題はないが、第4例は Intensive ‘je-hriya-te’ の重字音節に guṇa 化が生じていないもの (ji-hriya-ti) として理解すべきであろうか。第2、3例は ‘vijihriyati’ が原形であろうか。つまり、この原形から誤写によって共に一音節分が脱落した形が、第2例は ‘vi<ji>hriyati’ であり、第3例は ‘vijihri<ya>ti’ となった形であろうか。いずれにせよ、これらの形は定型句とも見なせる一節に現れる以上、4例全てに異なった形が用いられるのは不自然であり、MS[A]の誤写であると言ってよいと思われる。

以上のように、この一節だけを取り出してみても、写本と Lévi の読みは随分と相違し、しかも校訂本に採用された読みが原写本に基づいていないことを露見してしまうのである。その為、結果的であるとはいえ誤って、写本の支持のないままの語形が BHS 語彙として Edgerton によって収録されてしまったことになる。(それにしても写本に何ら支持のない ‘vigarhati’ はどこからきたのであろうか。また、MS[A] が ‘vyantikaroti’ と読むところを [B] は一貫して ‘vyantikaroti’ と読む。この後者の読みを Lévi は脚注に記録せず、したがって BHSD の ‘vyantikaroti’ の項目には MKV からの用例は記載されていない。)

5. まとめ

以上4点について、Lévi 校訂本と、それに基づいて Edgerton によって収集された BHS 的語彙の問題点を指摘した。それら以外にも、BHSD, BHSG が出版される以前の校訂本の例に漏れず、写本の語形を単に崩れたものとして正規のサンスクリット化がなされるケース、また MS[A] と [B] とを混合しながらの校合、或いは二次資料によるテキスト化がなされるケースが随所に見られる。

もし、原写本の再検討によって得られた結果に文献学的妥当性があるならば、我々は既に底本とされている文献を可能な限り原写本と共に読み直さなければならないのではないだろうか。Lévi のテキストが写本原本に基づかず「正された」写本に基づいて「正しい」サンスクリット校訂本になっている以上、我々は MKV についてかなりバイアスがかかったテキストを持っていることになる。即ち、正規のサンスクリット語形・表記に「正され」、それによって「在る」と信じられた語形を読んでいるのである。少なくとも MKV と KVU に関する限り、ネパール国立古文書館所蔵の写本の中では数少ない部派仏教資料として、写本原本に基づいた再校訂化の必要性を痛感する。ここに MKV の写本そのものを忠実にローマ字転写し、その校訂テキスト作成にむけての原資料を公表したい。最終的にはいわゆる「鸚鵡経類」との校合を含めた再校訂本を提示する予定であるが、その端緒として冒頭の因縁譚に相当する部分 (Lévi, pp. 22-29, 15) の写本を提供する。

Abbreviations:

BHS: Buddhist Hybrid Sanskrit
 BHSD: *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*.
 BHSG: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*.
 Karmav: *Mahākarmavibhaṅga* and *Karmavibhaṅgopadeśa* (used by Edgerton)
 KVV: *Karmavibhaṅgopadeśa*.
 MKV: *Mahākarmavibhaṅga*.

Bibliography:

Sanskrit Manuscripts [National Archives of Nepal, Kathmandu]:

MS[A]: Ms.-No. 4-20
 MS[B]: Ms.-No. 1-1697
 MS[C]: appended to MS[B]

Sanskrit Text:

Lévi, Sylvain

- 1932 *Mahākarmavibhaṅga (La Grande Classification des Actes) et Karma-vibhaṅgopadeśa (Discussion sur le Mahā Karmavibhaṅga), textes sanscrits rapportés du Nepal, édités et traduits avec les textes parallèles en sanscrit, en pali en tibétan, en chinois et en kutchéen*, Paris.
 1933 *Fragments de textes kouchéens (Udānavarga, Udānastotra, Udānālamkāra et Karmavibhaṅga) publiés et traduits avec un vocabulaire et une introduction sur le « Tokharien »*, Paris.

Vaidya, V.L.

- 1961 No. 15 *Mahākarmavibhaṅga*, No.15(a) *Karmavibhaṅgopadeśa*, in *Mahāyāna-sūtrasaṃgraha*, part 1, Buddhist Sanskrit Texts No. 17, Darbhanga, 1961, pp.177-220.

Tibetan Translations:

- sDe dge (Hakuju Ui et al., *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons*, Sendai: Tohoku Imperial University, 1934)
 No. 338 *Las rnam par 'byed pa* (Taipei Edition, vol. 15, 166/553(4)-173/596(7));
 No. 339 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhan* (Taipei Edition, vol. 15, 173/596(7)-176/619)
 Peking (*The Tibetan Tripitaka, Peking Edition, Catalogue & Index*, Kyōto [Rep. 1985])
 No. 1005 *Las rnam par 'byed pa* (TTP, vol. 39, 117-1-5~126-3-3);
 No. 1006 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhan* (TTP, vol. 39, 126-3-3~131-1-7).
 British Museum (E.D.Grinstead, "The Manuscript Kanjur in the British Museum," in *Asia Major*, New Edition Vol. XIII part 1-2, 1967)

- Or. 6724 *Las rnam par 'byed pa* (Vol. 59, 300a7-325a1)¹.
 sTog Palace Kanjur (T. Skorupski, *A Catalogue of the sTog Palace Kanjur*, Bibliographia
 Philologica Buddhica Series Major IV, Tōkyō, 1985, p. 156)
 No. 287 *Las rnam par 'byed pa* (Vol. 86, 358a5-385a3)
 No. 298 *Las kyi rnam par 'gyur ba zhes bya ba'i chos kyi gzhung bam po gcig*
 (Vol. 86, 148b2-165b3).

Pāli Text:

M.N. No.135: *Cūḷakammavibhaṅga* (M. N. III, pp. 202-206).

Chinese Translations:

- 『中阿含經』 No. 170 「鸚鵡經」 瞿曇僧伽提婆 (Gautama Saṃghadeva) [397-398
 CE.], T No. 26, vol.1, pp. 703c-706b11.
 『佛說淨意優婆塞所問經』 施護 (Dānapāla) [982-1017 CE.], T No. 755, vol.17,
 pp. 588c-590b.
 『佛說兜調經』 失訳 [265-316CE.], T No. 78, vol.1, pp. 887b-888b.
 『佛說鸚鵡經』 求那跋摩 (Guṇabhadra) [435-443 CE.], T No. 79, vol.1, pp. 888b-
 891a.
 『佛爲首迦長者說業報差別經』 瞿曇法智 (Gautama Dharmaprajña) [582 CE.], T
 No. 80, vol.1, pp. 891a-895b.
 『分別善惡報應經』 天息災 [982-1000 CE.], T No. 81, vol. 1 pp. 895b-901b.

Khotanese Translation:

Ed. by Mauro Maggi, *The Khotanese Karmavibhaṅga*, Series Orientale Roma, vol.
 LXXIV, Roma: Is. M. E. O., 1995.

Sogdian Translation:

- Rozenberg, F.A.
 1918 “Deux fragments sogdien-bouddhiques du Ts'ien-fo tong de Touen-houang
 (mission S. d'Oldenburg 1914-1915). I: Fragment d'un conte,” in *Izvestija
 Rossijskoj akademii nauk*, pp. 817-842.
 1920 “Deux fragments sogdien-bouddhiques du Ts'ien-fo tong de Touen-houang
 (mission S. d'Oldenburg 1914-1915). II: Fragment d'un sūtra,” in *Izvestija
 Rossijskoj akademii nauk*, pp. 399-474.
 MacKenzie, D.N.
 1970 *The «Sūtra of causes and effects of actions» in Sogdian*, London. [Translation of
 Chinese Taisho No. 81 and related to Pali Mahākammavibhaṅga].
 See also Lévi [1932, 1933].

¹ これ以外に Or. 6724 *Las kyi rnam par 'gyur ba* (Vol. 60, 144-151) が存在することが L.D.Barnett の
 索引に基づいて並川 [1984c], n. 2 に紹介されている。L.D.Barnett, “Index der Abteilung mDo des
 Handschriftlichen Kanjur im Britischen Museum (Or, 6724),” in *Asia Major*, vol. 7, 1931/32, p. 169.

Kuchean Translation:

Sieg, E.

1938 “Die kutschischen Karmavibhaṅga-Texte der Bibliothèque Nationale in Paris (zu Prof. Sylvain Lévi’s Ausgabe und Übersetzung,” in *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiet der Indogermanischen Sprachen*, 65, pp. 165-172.

See also Lévi [1932], pp. 243-257.

Studies:

Fukita, Takamichi (吹田隆道)

1990 “Sanskrit Fragments of the *Karmavibhaṅga* Corresponding to the Canonical Tibetan and Chinese Translations,” in *Annual of Buddhist Studies* [*The Bukkyō Bunka Kenkyūsho Nenpō*], No. 7-8, pp. 1-23.

並川孝儀(Namikawa, Takayoshi)

1984a 「*Mahākarmavibhaṅga* 所引の經・律について」『佛教大学研究紀要』第68巻、53-76頁 (“Sūtras and Vinayas Quoted in *Mahākarmavibhaṅga*,” in *Journal of Bukkyō University* [*The Bukkyō Daigaku Kenkyū Kiyō*], Vol. LXVIII, pp. 53-76).

1984b 「*Cakravartīsūtra* について」『印度學佛教學研究』第32巻第2号、1069-1066頁 (“A Study of the *Cakravartīsūtra* quoted in the *Mahā-karmavibhaṅga*,” in *Journal of Indian and Buddhist Studies* [*Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū*], Vol. XXXII, No. 2, pp. 1069-1066).

1984c 「鸚鵡經の展開—特に *Mahākarmavibhaṅga* を中心として」『佛教研究』第14号、27-43頁 (“Development of the *Mahākarmavibhaṅga* and the Similar Texts,” in *Buddhist Studies* [*Bukkyō Kenkyū*], Vol. XIV, pp. 27-43).

1985a 「「アビダルマ經」考— *abhidharme cakravartīsūtre* の用例を中心として—」『佛教大学大学院研究紀要』第13巻、1-16頁 (“On ‘*abhidharme*’ of *abhidharme cakravartīsūtre* Quoted in the *Mahākarmavibhaṅga*,” in *Memoirs of the Postgraduate Research Institute, Bukkyō University* [*The Bukkyō Daigaku Daigakuin Kenkyū Kiyō*], No. 13, pp. 1-16).

1985b 「*Mahākarmavibhaṅga* の所属部派について」『印度學佛教學研究』第33巻第2号、773-769頁 (“The *Mahākarmavibhaṅga* Belonging to the *Sammitiya*,” in *Journal of Indian and Buddhist Studies* [*Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū*], Vol. XXXIII, No. 2, pp. 776-769).

Simon, W.

1970 “A Note on the Tibetan Version of the *Karmavibhaṅga* Preserved in the MS Kanjur of the British Museum,” in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. XXXIII, part 1, London, pp. 161-166.

Tripāthī, Ch.

1966 “*Karmavibhaṅgapadeśa* und Berliner Texte,” in *Wiener Zeitschrift für die Kunde*

Süd- und Ostasiens, Band X, Wien, S. 208-219.

山田龍城(Yamada, Ryūjō)

1935 「鸚鵡經」『文化』第2-3号、103-113頁(“Oumu-kyō,” in *Bunka*, Nos.2-3).
(by N.K.)

II Transliterations of the Original Manuscripts Preserved in the National Archives of Nepal

Both the *Mahākarmavibhaṅga* and *Karmavibhaṅgasūtra* have been used before as the basis of the masterpiece created by Sylvain Lévi in his final years, *Mahākarmavibhaṅga et Karmavibhaṅgopadeśa*. In actuality, the name *Karmavibhaṅgopadeśa* is the creation of editor Lévi himself, based on his decision to call the unnamed commentary included in *Mahākarmavibhaṅga* manuscript an “*upadeśa*.”

The original two MSS of the *Karmavibhaṅga* are currently preserved in the National Archives of Nepal, and through the meritorious assistance of the Nepal-German Manuscript Preservation Project (NGMPP) they have been kindly made available to us in microfilm. As a result of our reading both, we discovered a number of differences from the text edited by Lévi and discussed in his notes. We concluded, therefore, that in the process of making the copies for him, a number of scribal errors and Sanskritizations must have occurred which, because he could not view the originals, Lévi could not have been aware of. Lévi’s research was thorough and based on sound philological principles, but it was done before the publication of Edgerton’s *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, and in the end we cannot be sure to what extent the Sanskritizations found in his edition came at the copying stage and to what extent they also may have resulted from Lévi’s own efforts at “correcting” the texts he had before him. One discovery we have made, for example, is that when Edgerton compiled his dictionary, some of the examples he used of Buddhist-hybrid forms were taken from Lévi’s edition, but as a result of reediting these MSS, we discovered that those forms are in fact not in the originals, but were the result of partial Sanskritizations of the original forms. Thus the need for a new edition of the *Karmavibhaṅga* based on the actual manuscripts is obvious. At this stage, we are only publishing a transliterated text of the opening story (= Lévi, pp. 22–29,15), but ultimately we intend to complete an entirely new edition.

These transliterated texts represent the respective MS traditions of the *Karmavibhaṅga*, namely MS[A] (Cat. no. 4–20) and MS[B] (Cat. no. 1–1697), both preserved in the National Archives of Nepal. Apparent mistranscriptions have been indicated, with correct readings given in the notes; corrections preceded by the word *read* indicate cases of obvious scribal error, while corrections preceded by *for* indicate cases in which our text may represent a nonstandard form rather than an error. For a list of the orthographic forms characteristic of this material, see the Appendix by N. Kudō. Otherwise we have allowed the original orthography of the MSS to stand as is. The texts of the two manuscripts are presented on facing pages to facilitate comparison. The numbers in parenthesis () throughout the texts refer to the folio and line numbers of each MS. Abbreviations follow the system established by H. Bechert, *Abkürzungsverzeichnis zur buddhistischen Literatur in Indien und Südostasien*, Göttingen, 1989 (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 3). The following symbols are used:

- + lost *akṣara*
- () restored *akṣara*
- [] damaged *akṣara*

| | |
|------|---|
| <> | omitted <i>akṣara</i> |
| { } | superfluous <i>akṣara</i> |
| <<>> | interlinear insertion |
| .. | illegible <i>akṣara</i> |
| . | single element missing |
| * | <i>virāma</i> |
| ○ | punch hole |
| ri | unclear mark, appears as combination of <i>anusvāra</i> and <i>virāma</i> |
| ' | <i>avagraha</i> |

In addition, commas, periods, and straight quotations marks have been added to the text for convenience of reading.

We must express our thanks to the former Director of the National Archives of Nepal, Professor B.D. Dangol, for his kind support in providing us with the microfilms of the MSS and other forms of assistance.

MS[A]: No. 4–20

(1v.1)om nāmo bhagavate Mañjuśriye kumārabhūtāya ||

samkhakṣirendukundasphaṭikahimada<<lakṣauma>>śubhrābhragauraiś
cañcatspaṣṭā iha śair ggaganatalagataiś chatrapamṅkyu(1v.2).i.. .[raiḥ |]
stavvair bhū bhātri yasya tridaśanaragu<<ru>>tsi○ddhagandha<<rva>>juṣṭaiḥ
prahvās taṃ sa<<rva>> eva praṇamata satataṃ buddham ādityabhandhum* ||¹

divyaiś candanacū(1v.3)rṇamiśraṇikārair mandānilodbhāsitar
viṇāvenu○mṛdaṅgadundubhiravair gandharvagītisvaraiḥ |
yo jātakṣitipālakaḥ pracalayaṃ kṛtsa tri(1v.4)lokālayaṃ
sarvvajñāya niruddhasarvvagataye buddhāya○ tasmai namaḥ²< | | >

Bhagavatā sūtraṃ bhāṣitam || | |

evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye Bhagavā(1v.5)n [Ś]rāvastyāṃ viharati sma ||
Jetavana Anāthapiṇḍasyārāme.

atha bhagavān* pūrvāhne nivāsya pātracīvara[m ādāya Śrā]vastīm piṇḍāya
prāvīkṣa<<ta>>³ sāva(2r.1)dānaṃ Śrāvastīm piṇḍāya caraṇa⁴ | yena Sukasya mānavasya
Taudeyaputrasya niveśanaṃ tenopasaṅkrāntas.

tena khalu [punaḥ sa](ma)[ye]na Sukasya mānavasya Todeyapu(2r.2)trasya⁵ niveśane
samkhakukuro⁶ gonikāstrtapa○ryaṅkaniṣarṇṇaḥ | asmāntarodhyānāyāṃ⁷ kāsapā[tr<y>ā]⁸
[śā]limāmsodanaṃ bhūṅkte | bhagavān a(2r.3)dr[ā](kṣ)[it]* [sa]m[kha]kukura⁹ gonikāstrate
paryāṅke ○niṣarṇṇa¹⁰ | | asmāntaropadhānāyā¹¹ kāmśapātryā paribhūṃjānaṃ | adrakṣīt
samkhakuku(2r.4)[ro]¹² bhagavaṃtaṃ dvāramūle, <dr>ṣṭvā ca punar bukkati |

atha ○bhagavāt*¹³ samkhakukuram¹⁴ etad avocata¹⁵ |

"etad api te samkha na damayati yad asi bho(2r.5)kārāt* bukkāram āgataḥ | |"

evaṃ¹⁶ ukte śakhakukuro¹⁷ 'tiśayitarośaś caṇḍibhūto 'nāttamaṇā gonikāstrtāt*

¹ Metre: Sragdharā.

² Metre: Śārdūlavikrīḍita.

³ Read *prāvīkṣat*.

⁴ For *caraṇam*.

⁵ Elsewhere *Taudeya*°.

⁶ Read °*kukkuro*.

⁷ Read °*opadhānāyāṃ*. This appears to be a mistranscription of a single akṣara *dhyā* for two *padhā*. See (2r.3): *asmāntaropadhānāyā*.

⁸ For *kāsapātryāṃ*. Cf. CDIAL, 2987. BHSG § 10.124.

⁹ For °*kukkuram*.

¹⁰ For *niṣarṇṇam*.

¹¹ For °*dhānāyāṃ*.

¹² Read °*kukkuro*.

¹³ Read *bhagavāṃ*.

¹⁴ Read °*kukkuram*.

¹⁵ Read *avocat*.

¹⁶ Cf. BHSG §2.64.

MS[B]: No. 1-1697

(Folios 1-3 are lost)

¹⁷ Read *samkhakukuro*.

MS[A]: No. 4–20

paryānkād avatīryādhaṣṭā¹ pa(2v.1)ryānkasya dārusyandanikāyā² niṣa{sa}rṇṇaḥ.

tena khalu punaḥ samayena Śuko mānavaḥ Ṭaudevaputro bahir gato 'bhūt*³ kenacid eva karāṇīyena.

athā(2v.2)[ga]ccha <Śu>ko³ mānavaḥ Ṭaudeyaputraḥ! adrākṣit* Su○ko mānavaḥ Ṭaudeyaputraḥ samkhakukuram⁴ adhaṣṭā⁵ dārusya<n>danikāyām prapatitaṃ dī(2v.3)ṣṭv[ā] [tv].⁶ punāntarjaṇam⁷ āmantrayate!

"keneva{m}⁸ yu○smākaṃ samkhakukuraḥ⁹ ki<m>ci{ta}d vaktāḥ¹⁰, ko 'smākaṃ madh(y)e madīyaputraṃ sa(m)khaku(2v.4)kuram kiñcid vukta¹¹" ti!

"api tv āgato 'bhūt* ○śramaṇo Go<tta>mau¹², dvāramūle 'vaṣṭhitaṃ tam ekha¹³ buk(k)ati! tam ena¹⁴ śramaṇo Gautta(2v.5)ma evam¹⁵ āhal 'etaḥ api te samkha na damayati jad¹⁶ asi bhokā<<rā>>d bukkāram āgataḥ! ' evam¹⁷ ukte samkha<<ḥ kukku>>ro 'tisayit(a)ḥ kupitaś caṇḍībhūto 'nāta(3r.1)manā gonikāstrā¹⁸ paryānkā{vata}d avatīryāda(s)tāt* paryānkasya dārusyandanikā{śā}yā ni{sa}rṇṇaḥ! "

atha Ś(u)ko [m](ā)ṇavo 'bhiṣaktaḥ kupitaś ca(3r.2)ṇḍībhūto 'nāttamaṇā {gonikā}<n¹⁹ na>>skramya²⁰ yena Je○tavanam anārthapiṃ<ḍa>dasyarāmāś²¹ tenopasamkrāntaḥ! | [t](e)[na] khalu punaḥ samayena bhaga(3r.3)vān aneka{sa}śatāyām bhikṣuparkhadi²²

¹ For *avatīryādhaṣṭāt*.

² Elsewhere (3r.1, 4v.2): *dārusyandanikāyā*. For *dārucandanikāyā?*, see Lévi's long note on Mh-karmv p. 22ff., note 5. Also see BHSD, s.v. *syandanikā*.

³ For °*āgacchac chuko*.

⁴ Read °*kukkuram*.

⁵ For *adhaṣṭād*. Cf. BHSG § 8.46.

⁶ The conjunction *ca* is required here. It is possible to discern that *ṣṭvā* was written over another character as a correction, as well as a damaged akṣara [tv] following it. The intention here was apparently to correct two akṣaras to *ṣṭvā ca*, with the scribe forgetting to change the *ca*.

⁷ For *punar antar*°. Cf. BHSD, s.v. *punā*.

⁸ For *ken'eva*. Cf. BHSG §4.20ff.

⁹ Read °*kukkurah*.

¹⁰ For *uktaḥ*. See 4r.2. Cf. BHSG §2.50, especially 51. Here the scribe corrected *vakata* to *vaktāḥ*.

¹¹ Read *vakti*. Cf. BHSG §2.50 and 51.

¹² Read *Gautamo*.

¹³ For *eso*.

¹⁴ For *enam*.

¹⁵ Cf. BHSG §2.64.

¹⁶ Read *yad*. Cf. BHSG §2.34.

¹⁷ Cf. BHSG §2.64.

¹⁸ For °*strāt*. Cf. BHSG § 8.46.

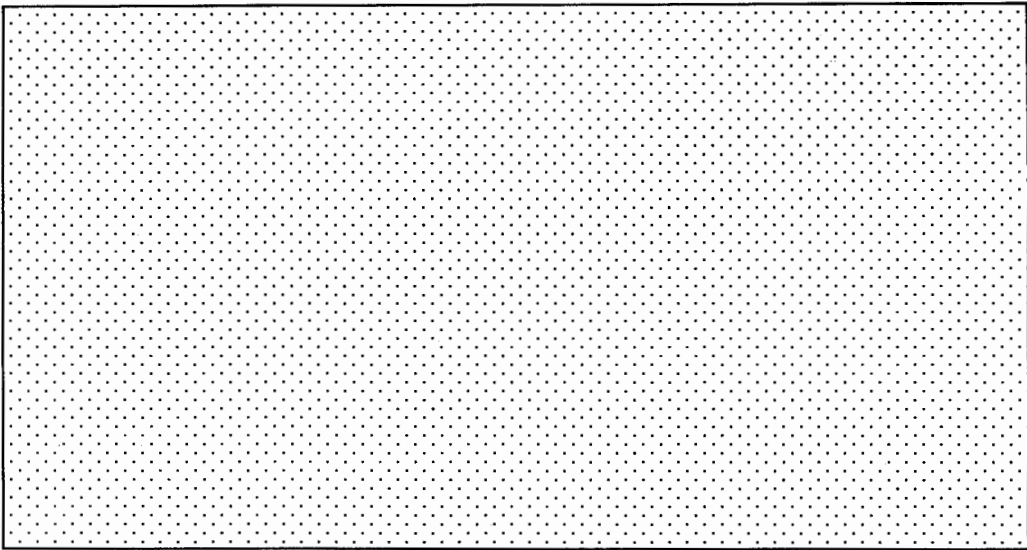
¹⁹ Here several words appear to have been omitted. The sentence should form a pair with to 6r.5–6v.1: *atha Suko mānavaḥ Ṭaudeyaputraḥ tan suvarṇṇa gopayitvā hr̥ṣṭatuṣṭodagrapītisomaṇajātaḥ! Savastyaṇ niṣkramya <<ye>>na bhagavāṃṣ tenopasamkrāntaḥ*. Thus at the very least the word *Śrāvastyaṇ* is necessary.

²⁰ Read *niṣkramya*.

²¹ Read °*pimḍadasyārāmās*.

²² For °*parśadi*.

MS[B]: No. 1-1697



MS[A]: No. 4–20

purastā¹ ○niṣarṇṇo dharman desayatil adrākṣid bhagavāt* Cchukaṃ² māṇavakaṃ
 Taudeyaputro (3r.4)[d]ū[rā]d(e)vāgacchantam, dṛṣṭvā <<ca pu(na)r bhikṣū>>ṇ āmantrayate
 sma | ○

"pasyatha³ yūyaṃ bhikṣavaḥ Śukaṃ māṇavaṃ Taudeyaputram ita evāgacchantam |"
 "<<(evam)⁴ bhadanta |>>"

"sace(3r.5)t* Cchuko māṇavaḥ Ṭaudeyaputro 'smin samaye kāla⁵ kuryyāt*, yathā
 bhallo nikṣiptaḥ evaṃ kāyasya bhedāt* paraṃ maraṇād apā<<ya>>durgativi(3v.1)nīpāte
 'vīcau narakeṣūpapadyante | tathā hy anena <<ma>>māntike cittaṃ pra<<dṛ>>ṣitaṃ⁶ |
 cittapradṛṣaṇād⁷ dheto evaṃ iheke⁸ satvāḥ kā[ya]sya bhe(dāt) paraṃ ma(3v.2)raṇād
 apāyadurgatāvīcau narakeṣūpapadyam | ○te | "

athānyatamo bhikṣuḥ ṭasyāṃ velāyāṃ gāthāṃ bhākhate⁹ sama¹⁰ |

"praduṣṭacittaṃ <dṛ>ṣṭaiva (3v.3)ekatyam iha pudgalaṃ |
 etam arthaṃ¹¹ vyākāṣit*¹² ○sāṣṭā bhikṣugaṇāntike |

idānī¹³ batādhikṣepaṃ¹⁴ <<kā>>laṃ kurvīta māṇavaḥ |
 nara(3v.4)keṣūpapadyete¹⁵{tti} cittaṃ hy etena dūṣitaṃ |

ya<<thā>> hy u○citraṃ¹⁶ nikṣiptaṃ¹⁷ evaṃ evan tathāgate |
 cittap[r]adūṣaṇād dhetoḥ satvā gacchanti (3v.5)durgatiṃ | "

adhikṣepya māṇavaḥ Ṭaudeyaputro yena bha<ga>vāṃ t<en>opasaṃkrāṃtaḥ,
 upasaṃkramaṃ bhagavatā [sā]r[dha](ṃ) [saṃmu]khaṃ saṃmodaniyāṃ sarajānī(4r.1)jāyā¹⁸

¹ For *purastān*. Cf. BHSG § 8.46.

² Read *bhagavān Śukaṃ*

³ Second person plural imperative *tha*; see BHSG §26.13.

⁴ Unfortunately this interlinear insertion in the margin has lost two akṣaras owing to damage by worms. This reconstruction comes from 6v.3: *eva bhadanta*. Cf. BHSD, s.v. *eva*.

⁵ For *kālaṃ*.

⁶ Read *pradūṣitaṃ*.

⁷ Read °*dūṣaṇād*.

⁸ For *ih' eke*. Cf. CPD, s.v. *eka* ⁵ "some."

⁹ For *bhāṣate*.

¹⁰ Read *sma*.

¹¹ Metrically read — U U here.

¹² For *vyākāṣit*. Cf. BHSG §32.49, 56.

¹³ For *idānīm*. Cf. BHSG §32.49, 56.

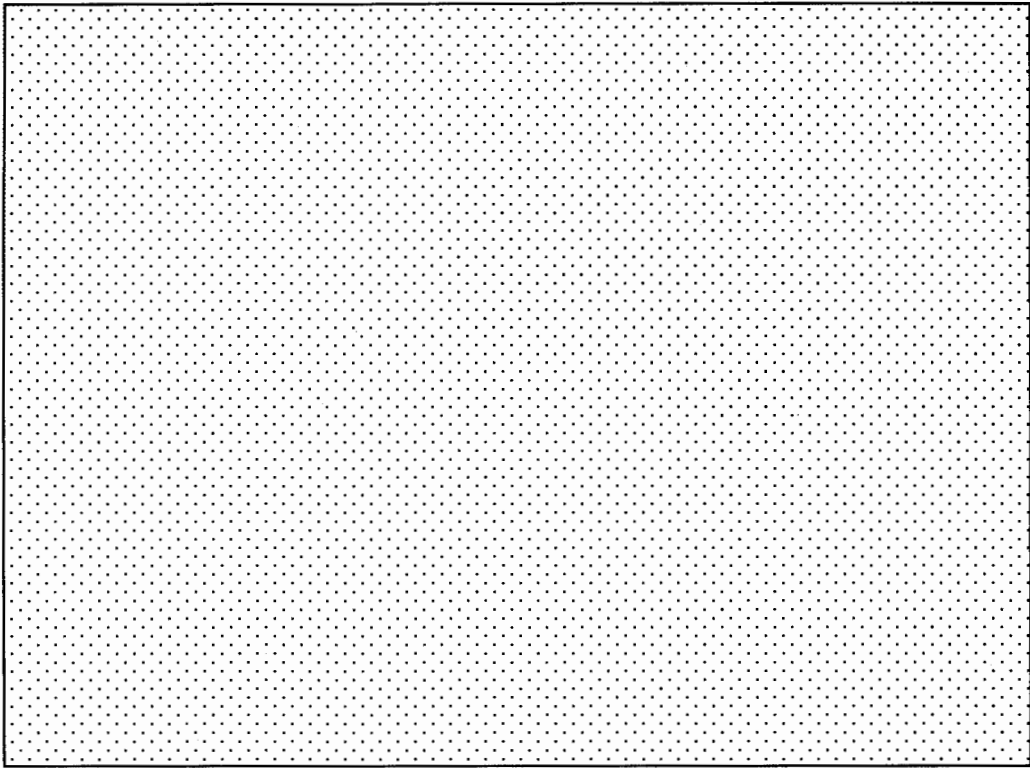
¹⁴ For Ab.,sg.; cf. v.Hinüber, *Mittelindisch* §304: *-am<-āt*.

¹⁵ Read °*padyeta*. Earlier transcription was °*padyate* and this was corrected insufficiently as °*padyete* instead of *padyeta*.

¹⁶ Cf. BHSD, s.v. *ucita*.

¹⁷ Cf. BHSG §2.64.

¹⁸ Cf. BHSD, s.v. *saṃrajanīya*.



MS[A]: No. 4-20

vividhā¹ kathā² <<vya>>tisāryekāntai³ niṣarṇṇa⁴. ekāntaniṣarṇṇaḥ Śuko māṇavaḥ
 Ṭaudevaputrau⁵ bhagavantam idaṃm⁶ eva {t*} vo<ca>t* |

"[āgat](o) [bh](a)vān* G(au)ttam[au] ⁷smāka[m] (4r.2)[ni]veśanam | "

"āgamaṇa māṇava⁸ | "

"{māṇava} bhagavat<<ā>> ○G[au]tameṇa saṃkhaḥ kukuraḥ⁹ kañcid uktaḥ | "

"ihāharī māṇava pūrvāhṇe nivā<syā> pātracivaram ā(4r.3)dāya S[r]ā[v]aṣ[t]iṃ
 piṇḍāya prāvīkṣat* | sāva○dāna¹⁰ Śrāvaṣṭiṃ piṇḍāya caran* yena bha{ga}vat atra¹¹ nivesanam
 tenopasamkrānta, upasamkrā(4r.4)mya [d]v[ā]ramule¹² 'vaṣṭithaḥ | tena khalu puna¹³
 samaye○na śakhakukuro¹⁴ gonikāstṛtamañcake 'dhirūḍho 'smāntaropadhānāy(ā)[m]
 <<(kām)>>sa{m}pātryā (4r.5)sālimāsodanam¹⁵ paribhuñkte | adrāṣīt*¹⁶ sakhaḥ kukuro¹⁷
 mā(m) dvāramule 'vaṣṭhitam, dṛṣṭvā ca pu{r}nar bukkati | tam eṇam evam vadā[mi]. '(etaḥ
 api te śaṅ)(4v.1)kha na da{ya}mayati yad asi{m} bhokārād bukkāram āgataḥ | ' evam ukte
 śamkhakukuro¹⁸ 'bhikhakṭaḥ¹⁹ kupitāś caṇḍibhūto 'nāttamaṇā gonikāstṛtāt*
 pa(r)ya(ñ)[k](ā)d avatī(r)yy(ā)(4v.2)dhaṣṭā²⁰ parya(ñ)kasya dārusyandanīkāyā²¹
 nikharṇṇaḥ²² | " ○

"kiṃ puna²³ bhagavān* Gautamaḥ śamkhasya kukurasyāsmākam²⁴ pūrvasyā²⁵ jāto²⁶
 jānīt[e] | "

¹ For *vividhbām*.

² For *kathām*.

³ For 'sāry' *ekānte*.

⁴ For *niṣarṇṇam*.

⁵ Read *Taudeya*°.

⁶ Cf. BHSG §2.64.

⁷ Read *gauttamo*.

⁸ For *āgamanam māṇava*.

⁹ Read *kukkurah*.

¹⁰ Read *sāvadānam*.

¹¹ For 'vato 'tra. Cf. BHSG §4.29.

¹² Read 'mūle. Elsewhere 2r4, 2v4 and 4r5: 'mūle.

¹³ For *punar*. Cf. BHSD, s.v. *punā*.

¹⁴ Read *śamkhakukkuro*.

¹⁵ For 'māsaudanam. Cf. BHSG §3.78.

¹⁶ For *adrāṣīt*. Cf. BHSG §2.26.

¹⁷ Read *śamkhaḥ kukkuro*.

¹⁸ Read 'kukkuro.

¹⁹ For 'bhīkṣakṭaḥ.

²⁰ For 'dhaṣṭāt.

²¹ For *dārusyandanīkāyām*. Cf. BHSG §9.50.

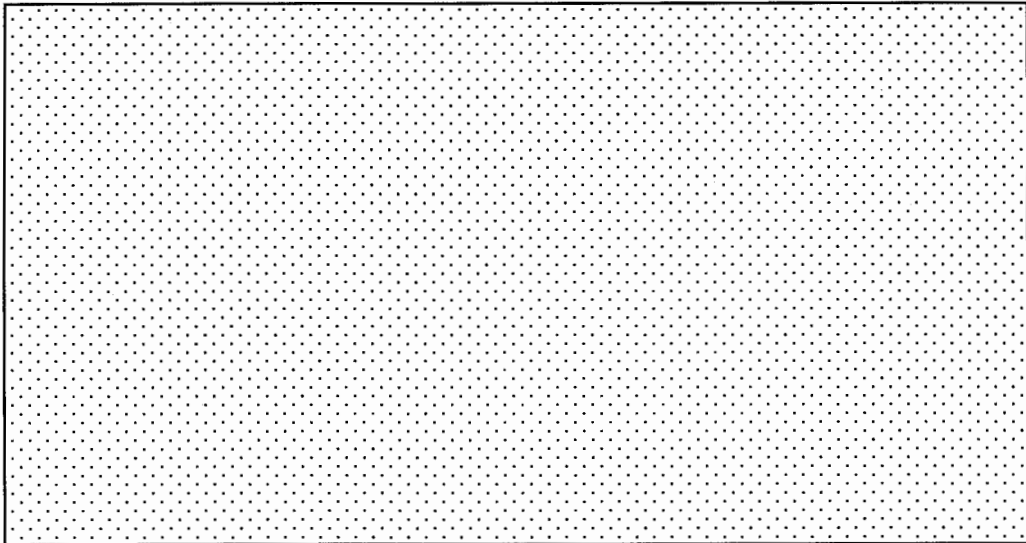
²² For *niṣarṇṇaḥ*. Cf. BHSG §2.26.

²³ For *punar*. Cf. BHSD, s.v. *punā*.

²⁴ Read *kukkura*°.

²⁵ Read *pūrvasya*.

²⁶ Read *jātau*.



MS[A]: No. 4-20

"alam (4v.3)māṇ(a)v(a) [tiṣṭh]a, mā me tam arṣam¹ pariprākṣīt*¹ | mā ○ te bhavikṣati² | āghātaś cākṣāntiś ca cetaso daurmaṇasyam | "

dvi pi ti pi³ Śuko māṇavaḥ Ṭaudevapu(4v.4)tro⁴ bhagavaṃtam etad avocat*¹ |

"<kiṃ> punar bhagavān* Gauttamau ○ 'smākam saṃkhaḥ⁵ kukuraṃ⁶ purvikā<<yā>>⁷ jāto⁸ saṃjānīte |

"alam māṇava tiṣṭha mā me tam artham parip(r)ākṣī(4v.5)n, mā iheva⁹ ca te bhaviṣyaty, ānmātaś¹⁰ cākṣāntiś ca cetaso dau(r)maṇasyam | "

anyāthātvaṃ māṇava yāvat trir apy etam artha nā.. ..

".. .. [h]i māṇava śṛnu, sād[h]u ca (5r.1)śuṣṭhu ca maṇasikuru, bhāṣiṣye | yaḥ ṭe māṇava pitā Ṭaudeyaḥ{1} sa eṣa kājasya¹¹ bhedād dhīnāyāṃ śvayonāv upapa[n]aḥ | "

"kim etad bho Gautama eva(ṃ) bhaviṣy[ati a](5r.2)smākam <<[pi]>>tā ca yonau | istayajña āhitāgnir ucchri○tayū<<pa>>ḥ saṃnīyatam¹² kāyasya bhedāt* śubhre brahmaloke upapano¹³ bhaviṣyaty āneneva¹⁴ | "

"te māṇa(5r.3)va mānābhīmānena pitā Ṭaudeya mahādānapati ○ śvayonāv upapanā 'pitur¹⁵ māṇava yadi me bhāṣita¹⁶ na śraddadhāsi | tena hi tvam māṇa(5r.4)va ye[na sva]kam [ni]vesanam tenopasaṃkrāmaḥ | upa○saṃkrāmya saṃkham kukuraṃ¹⁷ evaṃ vada | 'saced bhavāta¹⁸ saṃkhaḥ kukuro¹⁹ 'smākam purvikāya²⁰ (5r.5)jātau pitābhū²¹ Ṭaudeyaḥ | adhiroha gavanikāstṛtam²² paryāṅkam.' adhiroksyati, adhirūdham cainam evam vada²³. 'saced bhavām{tam} saṃkhaḥ kukuro²⁴ [']smākam (5v.1)purvikāyāṃ jāto²⁵ pitābhū Ṭaudeyaḥ

¹ Read *artham*.

² For *bhaviṣyati*. Cf BHSG §2.26.

³ For *dvir api trir api*. Cf BHSG §19.3, Pischel §438; BHSG §4.3, 11, 12; BHSD, s. v. *pi*.

⁴ Read *Ṭaudeya*°.

⁵ Read *saṃkham*.

⁶ Read *kukkuram*.

⁷ For *purvikāyām*. Cf. BHSG §9.50.

⁸ Read *jātau*. See 4v.2.

⁹ For *ib'eva*.

¹⁰ Read *āghātaś*.

¹¹ Read *kāyasya*. Cf. BHSG §2.34.

¹² Read *saṃnīyate*. Mistranscribed *e* and *am*.

¹³ Read *upapanno*.

¹⁴ For *ānen'eva*.

¹⁵ Read *upapanāḥ pitur*. Probably a mistranscription of *visarga* and *avagraha*.

¹⁶ For *bhāṣitam*.

¹⁷ Read *kukkuram*.

¹⁸ Read *bhavān*.

¹⁹ Read *kukkuro*.

²⁰ For °*kāyām*. Cf. BHSG §9.57.

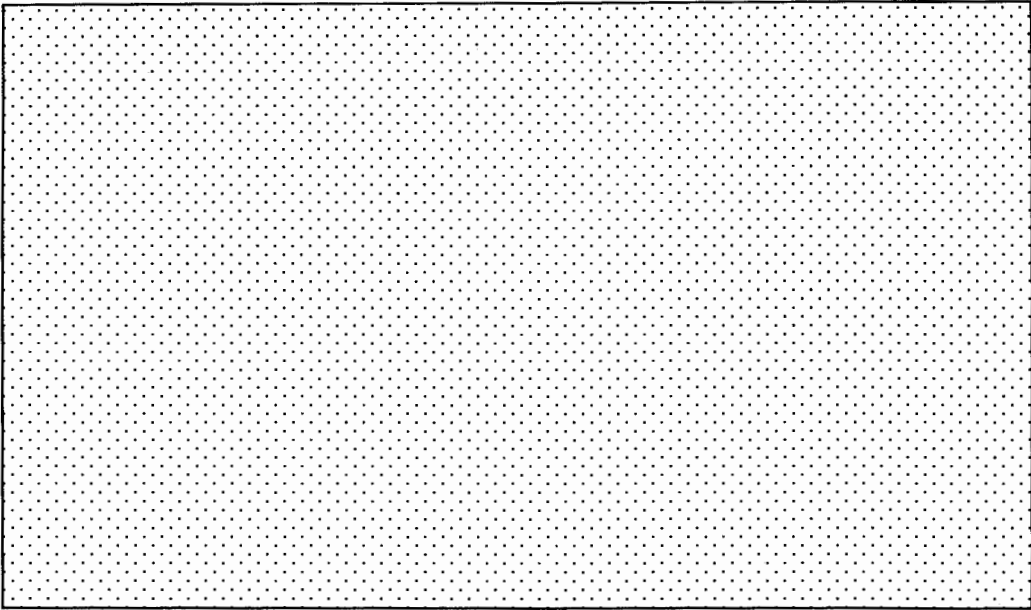
²¹ For *pitābhūt*. Cf BHSG §32.107.

²² Read *gonikāstṛtam*.

²³ Probably the akṣaras *nam evam vada* was rewritten.

²⁴ Read *kukkuro*.

²⁵ Read *jātau*.



MS[A]: No. 4–20

¹paribhūṃjī<ta> bhavān āsmāntaropadhāṇāyāṃ kāsapatryā sālīmā<ṃ>sodanam²'
paribhokṣyate| bhuktavanta³ cena[m⁴ e](vaṃ vada). (5v.2)'saced bha{ga}vāt⁵ saṃkhaḥ
kukuro⁶ 'smākaṃ purvikā ○yā⁷ jātau pitābhū⁸ Taudeyaḥ| ya⁹ te 'smākaṃ maraṇasamaye
mama santam svāpateyam nopa(5v3)darśitam tad upadarsaya| ' upadasayikṣamti¹⁰ |"

a○tha Suko māṇavaḥ Ṭaudevaputro¹¹ bha{ga}vātā bhā<<kṣi>>tam udgrhya
paryavāpya yena svakaṃ nivesanam (5v.4)[t]e[n]opasaṃkrantaḥ¹², upasaṃkrama
saṃkhaḥ¹³ kukuram¹⁴ e○tad avocat* |

"saced bha{ga}vām{tam} saṃkhaḥ kukuro¹⁵ 'smākaṃ pūrvikāyā¹⁶ jātau pitābhū¹⁷
Taudeya<<h>>, (5v.5)adhiroha gonikāstṛta¹⁸ paryāṅka¹⁹."

adhirūḍham cai<<na>>m evam āha |

"sac<<e>>d bha{ga}vā{tam}²⁰ saṃkhaḥ kukuro²¹ 'smākaṃ pū<r>vikāyāṃ jātau
pitābhū²² Taudeya²³, paribhūṃ(6r.1)jatu bhavān āsmātaropa>dhanāyāṃ kāsapatr<y>ā²⁴
sālīmāṃsodanam²⁵ paribhuktavān* |

¹ There is a dropped sentence in Lévi here, where *pitābhū Taudeyaḥ paribhūṃjī<ta>* was mistakenly confusing with the next line *pitābhū Taudeyaḥ|ya*. Probably the copy he obtained did not have this sentence because of a scribal error.

² For °māṃsaudanam.

³ For *bhuktavantam*.

⁴ For *c'enam*.

⁵ Read *bhavān*.

⁶ Read *kukkuro*.

⁷ For *purvikāyāṃ*. Cf. BHS §9.50.

⁸ For *pitābhūt*. Cf. BHS §32.107.

⁹ For *ya*. Cf. BHS §2.98.

¹⁰ For *upadarsayisyamti*.

¹¹ Read *Ṭaudevaputro*.

¹² Read °*krāntaḥ*.

¹³ Read *saṃkham*.

¹⁴ Read *kukkuram*.

¹⁵ Read *kukkuro*.

¹⁶ For *pūrvikāyāṃ*.

¹⁷ For *pitābhūt*. Cf. BHS §32.107.

¹⁸ For *gonikāstṛtam*.

¹⁹ For *paryāṅkam*.

²⁰ Read *bhavān*.

²¹ Read *kukkuro*.

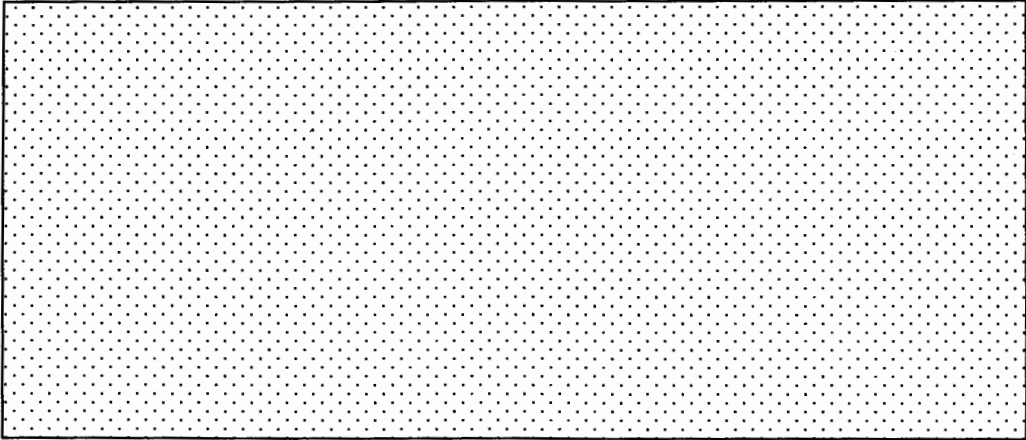
²² For *pitābhūt*. Cf. BHS §32.107.

²³ For *Taudeyaḥ*.

²⁴ For *kāsapatryāṃ*, Cf. BHS §10.124.

²⁵ For °*māṃsaudanam*.

MS[B]: No. 1-1697



MS[A]: No. 4–20

bhuktanta¹ cainam evamm² eva-m³ āha |
 "saced bhavā{taṃ}⁴ sa<ṃ>khaḥ kukuro⁵ 'smākaṃ pūrvi(6r.2)kāyā⁶ jātau pitābhū⁷
 Taudeyaḥ, ya⁸ te 'smā ○kaṃ maraṇasamaye mama satum⁹ svāpateyaṃ nopada¹⁰ rsi<<taṃ>>
 tad upadarsaya | "

atha saṃkhaḥ (6r.3)kukuro¹¹ gonikāstrtā¹² paryāṅkāḍ avatīrya
 ○yenānyatamapurāṇavāsagrhaṃ tenopasaṃkrāntaḥ | upasa(m)kramya caturu¹³
 parya<ṃ>kapā(6r.4)dakā¹⁴ po¹⁵ danakharikābhīr ava{tī}likhitama ○dhyāñ ca
 mukha{ṃ}tu<n>dakenopajighrati¹⁶ | yataḥ{ | } sa Śuko māna<va>ṣ Ṭaudeva{pṛ}trah¹⁷
 kṛtākṛtasya (6r.5)hiraṃṇyaśuvarṇṇasya catu<<ro>> loha{ṃ}saṃ<<ghā>>ṭār¹⁸
 adhiga<ta>vān madhyāc ca sauvarṇṇa daṇḍakamaṇḍalu¹⁹ |

atha Suko mānavaṣ Ṭaudeyaputraṣ ṭan suvarṇṇa²⁰ gopayitvā
 hr̥ṣṭa(6v.1)tuṣṭodagrāpītisomaṇa<sya>jātaḥ²¹ | Savastyān²² niṣkrāmya <<ye>>na bhagavāṃṣ
 tenopasaṃkrāntaḥ |

tena khalu punaḥ samaye<<na>> bhagavān anekasatāyāṃ bhi<kṣu>parśadi punaḥ
 ṭān niṣa(6v.2)ṛṇṇo dha{ma}rma²³ desayati | adrākṣid bha<ga>vām{t} Sukam ○māṇavaṃ
 Taudeyaputraṃ durata evāgacchantaṃ. dṛṣṭvā ca punar bhikṣūṇ āmantra{r}jyati sma |

¹ For *bbuktantañ*.

² Cf. BHSG §2.64.

³ Cf. BHSG §4.59. 5v.5: *adbirūḍhaṃ cai<<na>>m evam āha* |.

⁴ Read *bhavān*.

⁵ Read *kukkuro*.

⁶ For *pūrvikāyāṃ*.

⁷ For *pitābhūt*. Cf. BHSG §32.107.

⁸ For *yat*. Cf. BHSG §2.98.

⁹ Read *santaṃ*.

¹⁰ MS[B] starts here (4r.1).

¹¹ Read *kukkuro*.

¹² For *gonikāstrtāt*. Cf. BHSG §8.46.

¹³ Read *caturah*.

¹⁴ Read *°pādakān*. Probably a mistranscription of the consonant *n* and a vowel sign for next akṣara. Correctly *°kān pā°*. See next note.

¹⁵ Read *pā*. Because the ligature *n-* from the preceding word attached to the letter *pā* was misunderstood to be a vowel marker for the *pe* akṣara, the combination was read as *po°*.

¹⁶ For *°mukhatuṇḍa°*, MS[B]4r2: *°mukhatuṇḍa°*.

¹⁷ Read *Ṭaudeyaputraḥ*.

¹⁸ Read *°saṃghātān*. Probably mistranscribed *n=a* and *r=a*.

¹⁹ For *°daṇḍakamaṇḍalum*.

²⁰ For *suvarṇṇam*.

²¹ For *°prīti°*. MS[B] 4r3: *[hr]ṣṭa²¹ tuṣṭodagrāpītisomaṇasya jāto*.

²² Cf. BHSG §10.122.

²³ For *dharmam*.

MS[B]: No. 1–1697

(4r.1)+++++...¹ tad upadarśaya ||

atha śaṅkhakukkuro goṇikāstrtāt paryāṅkāḍ avatīrya
 yenānya(s)tamapurāṇavāsagṛhan tenopasaṃkrānta, upasaṃkramya catura²
 paryāṅkapāḍakāt³ pāḍana(4r.2)+++++...⁴khita[ma]dhyāñ ca mukhatuṇḍakeno(pa)jighrati
 {yatih}. yataḥ (l) Śu○ko māṇavas Taudeya[pu]tro⁵ kṛtākṛtasya hiranyasuvarṇṇasya caturo
 lohisaṃghātān adhigatavān madhyā⁶ ca sauva(4r.3)+ +...⁷ kamaṇḍalu⁸ |

atha Śuko māṇavas Taudeyaputras tan suvarṇṇa⁹ gopayitvā ○
 [hr]ṣṭatuṣṭodagrprītisaumaṇasya jāto Śrāvastyā¹⁰ niṣkramya yena Bhagavāms
 tenopasaṃkrāntas.

tena khalu samaye(4r.4)++++¹¹ vān anekasatāyāṃ bhi<...>kṣupaṛṣadi purastān niṣarṇṇo
 dharman deśaya○ti| adrākṣic Chuka[m] māṇavaṃ Taudeyaputraṃ dūrād evāgacchantan
 dṛṣṭvā ca puna¹² bhikṣūnām āmantrayate sma | |

¹ Lévi, relying on his copy, indicates the beginning of MS[B] as *tad upadarśaya* (p. 28, fn. 3), but before these words we can also see two illegible akṣaras, probably read as (*rśitam*).

² For *caturah*.

³ Read °*pāḍakān*.

⁴ Read (*kharikābbir avali*).

⁵ Originally °*trau*, the upper vowel sign has been erased.

⁶ For *madhyāc*. BHSG §8.46.

⁷ Read (*rṇadaṇḍa*).

⁸ For °*kamaṇḍalum*.

⁹ For *suvarṇam*.

¹⁰ For *Śrāvastyām*.

¹¹ Read (*na bhagā*).

¹² For *punar*. BHSD s.v. *punā*.

MS[A]: No. 4–20

"pasya(6v.3)tha yūtham¹ bhikṣavaḥ Śukam māṇava² Taudeyaputraṃ Oḍurata evāgacchantāṃ."

"eva³ bhadanta | "

"sacet* t-Suko māṇava{sa}ṣ Taudeyaputro 'smiṇa⁴ sa<ma>ye (6v.4)kālaṃ kuryāt* yathā bhālo⁵ nikhiptaḥ⁶ | evaṃ kāyasya bhedāt* sugatau svargaloke deveṣūpapadyante <<yadiva?>> |"⁷

athānyatamo bhikṣu⁸ tasyaṃ⁹ velā(6v.5)yāṃ gā<thāṃ> bhākhate¹⁰ |

prasannacitta¹¹ dṛṣṭ<v>aiva e<<ka>>tyam¹² iha pudgala¹³ |
etam arthaṃ vyākārṣīt¹⁴ sā{tā}ṣṭā bhikṣugaṇāṃtike | |

idāni¹⁵ gatadoṣo <'>yāṃ kālaṃ kurvīta māṇavaḥ
(7r.1)upapadyaita¹⁶ deveṣu {cittama} cittam¹⁷ asya prasāditaṃ¹⁸ |

yathā duritaṃ nikhiptaṃ¹⁹ evaṃ <e>va tathāgate |
cittaprasādāna²⁰ hetoḥ satvā gacchanti²¹ sadga(7r.2)tiṃ | |

¹ Read *yūyam*. Mistranscribed *ya* and *tba*.

² For *māṇavam*.

³ For *evam*. Cf. BHSD, s.v. *2eva*.

⁴ Read *'smiṇ*.

⁵ Read *bhālo*. MS[B]4r5: *bhallo*.

⁶ For *nikṣiptaḥ*. Cf. BHSG §2.26.

⁷ Two sentences are omitted, see MS[B].

⁸ For *bbikṣus*.

⁹ Read *tasyāṃ*.

¹⁰ For *bhāṣate*.

¹¹ For *prasannacittam*, but metrically U is required.

¹² Cf. BHSG §4.55, 56.

¹³ For *pudgalam*.

¹⁴ For *vyākārṣīt*. Cf. BHSG §32.49, 56.

¹⁵ For *idānīm*.

¹⁶ For *upapadyeta*. Cf. BHSG §3.69.

¹⁷ Read *cittam*.

¹⁸ The first transcription is *m=aprasyasāditaṃ*. These two akṣaras *pra* and *ya* have numbers 2 and 1 to indicate the order of reading.

¹⁹ For *nikṣiptam*. Cf. BHSG §2.64.

²⁰ For *°prasādānāt*. The akṣara *pra* is rewritten over the form *°prā°*.

²¹ The akṣara *ccham* is rewritten.

MS[B]: No. 1-1697

"paśyatha yū(4r.5)+ + +¹ vaḥ Śukan māṇava[m] Taudeyaputraṃ dūrata evāgacchantam."

"evam bhaga○van."

"sacec Chuko māṇavas Taudeyaputrā² 'smin samaye kālaṃ kuryād yathā bhallo nikṣip... ..m s.g.[tau]³ sva(4r.6)+ + +⁴[nt]e.

⁵tathā hy anena mamānti<...>ke cittam prasāditam cittaprasādanā⁶ heto⁷ bhikṣavaḥ | evam ihaike satvāḥ kāyasya bhedān⁸ sugatau svargalo.[e] + + + + +⁹ (| |)

+ + + + (4v.1) + + +¹⁰ s tasyām v[e]lāyām gāthām bhāṣate |

prasannacitta¹¹ dṛṣṭvaiva¹² ekadyam¹³ iha pudgal[a]¹⁴ | etam artham¹⁵ vyākārṣic chāstā bhikṣugaṇāntike | |

idānī¹⁶ <gatadoṣo' yaṃ> kālaṃ kurvīta māṇavaḥ | upa[p]. + + + + + + + + + + (4v.2) +¹⁷ (|)

+ +¹⁸ dūritam nikṣipta evam eva tathāgate | cittaprasādanā¹⁹ hetoḥ satvā ○ gacchanti saṅgatim²⁰ | |

(To be continued)

¹ Read (yaṃ bhikṣa).

² For °putro 'smin. BHSG §8.24.

³ Read nikṣi(ptaḥ | eva)m (kāyasya bhedāt) s(u)g(a)tau.

⁴ Read (rgaloke deveśūpapadya).

⁵ From here to the beginning of the verse, MS[B] does not correspond to MS[A]. However, in the parallel context above, MS[A] has the following passage that corresponds to MS[B]: *tathā hy anena «ma»māntike cittam pra«dṛ»ṣitam | cittaprasādanā dheto evam ih' eke satvāḥ kāyaḥ bhe(dāt) param ma(3v.2)raṇād apāyadurgatāvīcau narakesūpapadyam○te | athānyatamo bhikṣuḥ tasyām velāyām gāthām bhāṣate s(a)ma | (3v.1-2)*. Unfortunately, the MS[B] folio which might contain this parallel passage is missing.

⁶ For °prasādanād. BHSG §8.46.

⁷ For hetoḥ. Cf. BHSG §12.37.

⁸ Read bhedāt.

⁹ Read °lo(k)e (deveśūpapadyante).

¹⁰ Read (athānyatamo bhikṣu).

¹¹ For °cittam. Here, a short vowel is required metrically.

¹² Vowel hiatus. BHSG §4.55-56.

¹³ For ekadyam.

¹⁴ For pudgalam.

¹⁵ See MS[A]. Here, two short vowels are required; thus, read one long vowel as two short vowels.

¹⁶ For idānīm.

¹⁷ Read upa(adyeta deveśu cittam asya prasāditam).

¹⁸ Read (yathā).

¹⁹ For °sādanāt. BHSG §8.46.

²⁰ MS[A]: sadgatim.


Appendix

| Descriptions of the Manuscripts | | | | | | |
|---------------------------------|--------|-----------|--------|--------|-------|-------------|
| | No. | material | script | folios | lines | size (inch) |
| MS(A): | 4-20 | palm-leaf | Nevārī | 76 | 5 | 11 × 1 1/2 |
| MS(B): | 1-1697 | palm-leaf | Nevārī | 27 | 6 | 12 × 1 3/8 |

Orthographic Characteristics

MS[A] is a manuscript with many scribal errors. Not only are characters and words dropped, but entire lines are missing, presumably from the copyist's eyes jumping across the text. Probably for this reason, there are many interlinear insertions. Among these appear to be instances where the scribe has realized his omission and added the dropped characters under the appropriate space on the line below, which then led to this space being skipped over when the next line was copied.

The following irregularities tentatively listed here are found in MS[A], many of which are common to other manuscripts that have emerged from Nepal.

- 1.1 Visarga
 - 1.1.1 loss of *visarga* [frequent]
 - 1.1.2 assimilation of *visarga* [-ḥ t- > -s t- or -ṣ t-]
- 1.2 Anusvāra
 - 1.2.1 loss of *anusvāra* [frequent, mostly in case of accusative and locative case endings].
 - 1.2.2 *anusvāra* replaces all class nasals (*ñ, ṅ, ṇ, n, m*) [frequent].
 - 1.2.3 *anusvāra* insertion.
 - ṃm vowel- BHSG §2.64.
 - ṃtt for -tt e.g., ciṃtta.
 - 1.2.4 combination of *anusvāra* and *virāma*.
Beside the usual appearance of *anusvāra*, MS[A] also contains a peculiar form, wherein the *virāma* sign appears under the *anusvāra* in the same space. The combination looks like this: . We transliterate it as *m̄*.
- 1.3 Consonants
 - 1.3.1 *kṣ* for *ṣy* BHSG §2.26.
bhavikṣati; upadarsayikṣanti.
 - 1.3.2 *kb* for *kṣ* BHSG §2.25.
 - 1.3.3 *kb* for *ṣ* BHSG §2.26.
nikharṇṇah; ekha; anīrkhyā.
 - 1.3.4 *g* for *jñ*, and *jñ* for *g*.

- gena; alpabhojñā, mahābhojñā.
- 1.3.5 *j* for *y*, and *y* for *j* BHSG §2.34.
jad; kāja; jathā; pratyāyātaḥ.
- 1.3.6 *n* for *ṇ*, and *ṇ* for *n* [frequent].
- 1.3.7 *v* for *y* BHSG §2.31.
taudevaputra.
- 1.3.8 *ś* for *s* BHSG §2.58.
śuvarṇa.
- 1.3.9 *st(b)* for *st(b)* BHSG §2.61.
- 1.3.10 *s* for *ś* BHSG §2.63.
Proper names *Śaṅkha* and *Śuka* are variously written.
Śuka > Śuka, Suka;
Śaṅkha > Saṅkha, Śaṅkha, Śakha, Saṅkha, Saṅkha.
- 1.4 Vowels
- 1.4.1 short for long, and long for short.
a/ā: sākyāḥ.
i/ī: śvareṇa; niyatopapatti.
u/ū: purvva [frequent].
e/ai: upapadyaita.
o/au: todeya°; °māmsodana.
- 1.4.2 semivowel for vowel (*va* for *u*).
vaktah; dvaḥprajñā.
- 1.5 duplication of consonants.
- 1.5.1 after *r*.
-r gg-; -r nn-; -r jj-; -r ṇṇ-; -r tt-; -r nn-; -r mm-; -r yy-; -r vv-.
- 1.5.2 miscellaneous.
gautama [< gautama], śramaṇa [< śramaṇa], niṣarṇa [< niṣaṇṇa], hiraṇya
[< hiraṇya].
-tr- > -ttr-.
kku- > ku-.
- 1.6 loss of final consonant especially before same initial phoneme.
pitābhū taudeyaḥ [< pitābhūt].
ya te [< yat].
2. Sandhi
- 2.1 adjoining vowels left unchanged with hiatus.
-a e-: dṛṣṭaiva ekatyam [in verse].
-e a-: sūtre ajita°.
-e u-: sūtre uktam.
- 2.2 external (consonant).
-t ś-(s-) > -t cch-(s-): sacet cchuko, sacet t-suko.
-t voiced: -t b(h)-/g- [unchanged].
3. skipped *akṣaras* and words.
see MS[A] 6v.4.

MS[B]

The orthography of this manuscript is quite proper. Compared to MS[A], there are quite few copying errors.

However we do find the following errors throughout the text:

- (1) *anusvāra* assimilates into nasal
e.g. dharman deśayati; śukan mānavam
- (2) very few cases where *anusvāra* replaces nasals.
- (3) very few examples of double consonants following "r", as is commonly found in Nepalese MSS.

(by N. K.)